



Data

監督: ニール・バーガー

出演: ブライアン・克蘭ストン/
ケヴィン・ハート/ニコール・キッドマン/ゴルシフ
テ・ファラハニ/アヤ・ナオ
ミ・キング/テイト・ドノバン/
ジャヒ・ディアロ・ウィ
ンストン/ジュヌビエ
ブ・エンジェルソン/ジュ
リアナ・マルグリーズ/スザ
ヌ・サボイ

■■■ショートコメント■■■

◆近時、映画にできる面白いネタを探し当てるのが困難になっている邦画界では、必然的に「原作モノ」が多くなっている。そして、同様の状況下にあるハリウッドでは、海外のヒット作の「リメイクもの」が多くなっている。本作はその代表で、フランスで大ヒットした『最強のふたり』(11年)のハリウッドによるリメイク版だ。

フランスで『アーティスト』(11年)を押しつけて、オマール・シーがセザール賞の主演男優賞を受賞し大ヒットした同作は、たしかに面白かった(『シネマ29』213頁)。その理由は、「なぜこの男がいいのか?」との質問に対して、「それは、同情しないから!」とのスタンスが明確だったからだ。しかし、本作は・・・?

◆フランス版にもフィリップがドリスを雇う前に、フィリップに仕えていたベテラン女性イヴォンヌと美人秘書のマガリーが登場していたが、本作では、秘書のイヴォンヌ役にニコール・キッドマンが扮している。しかし、『最強のふたり』と題された本作は、本来ブライアン・克蘭ストン扮するフィリップと、ケヴィン・ハート扮するデル・スコットの2人の男が主人公で、女性は2人の男のストーリーを面白く盛り上げるための引き立て役のはず。それなのに、なぜ私の大好きな美人女優ニコール・キッドマンをイヴォンヌ役で起用したの?そしてまた、本作におけるイヴォンヌの役割は?

◆ハリウッド版におけるフィリップの豪邸はフランス版以上だが、本作ではフィリップのオペラ好きの側面がヤケに強調されている。もちろん、貧乏人のデルにオペラの良さがわかるはずはない。そう思っていると、意外にも……。他方、フランス版でもハリウッド版でも、フィリップは顔(目、耳、口、鼻等)だけは一人前だが、四肢は完全にマヒしているから、介護人はもちろん本人も大変。しかし、映画では、下ネタも含めて、会話もストーリーもかなりきわどいところまで進めていくからそれに注目!

私が意外だったのは、そんなにひどい身体の欠陥があっても、フィリップの気持がトコ

トン前向きで元気なこと。そうだからこそ、まるで漫才のようなフィリップとデルの掛け合いが成立するのだが、ここまで元気だと、正直少し嘘っぽさも・・・。

◆あれほど両極端ながら、あれほど仲のよかった2人がケンカ別れに至るシーケンスはストーリー展開の山場だが、本作ではそこがイマイチ。また、イヴオンヌがいつの間にか退職しているというストーリー展開も、イマイチ。冒頭のハラハラドキドキのシーンがラストで再現されて、ストーリーが繋がっていく演出はバッチリだが、ストーリーを締めくくる結末への持って行き方も、本作はイマイチ。

したがって、残念ながら本作では「青は藍より出でて藍より青し」の理想は実現できなかったようだが・・・。

2020（令和2）年1月4日記